二条裸麦「キラリモチ」の高品質安定栽培技術の開発

農業総合センター農業研究所

精麦用品種の二条裸麦「キラリモチ」は、機能性成分であるβ-グルカンを多く含み、炊飯後に褐変しにくく、もち性（良食感）であり、実需者ニーズの高い品種です。しかし、遅れ穂が発生しやすく穂揃いが悪い、収量性がやや低いという課題があります。そこで、「キラリモチ」を高品質で安定的に栽培するため、遅れ穂抑制と多収を両立する栽培法を開発しました。

品種の特性

二条裸麦「キラリモチ」（**写真１**）は、（国研）農研機構近畿中国四国農業研究センターで育成された品種です。食物繊維のβ-グルカン含有率が高く、プロアントシアニジンフリー（炊飯後褐変しにくい、**写真２**）、もち性といった優れた特性を持っています。また、「キラリモチ」はオオムギ縞萎縮病Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ型に抵抗性を有しています。

写真１
子実の様子

写真２
炊飯12時間後の褐変の様子

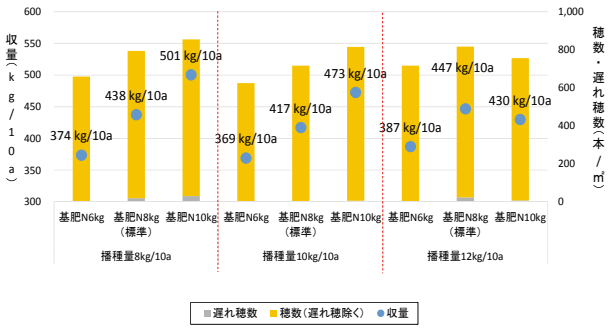

図１　播種量と基肥窒素量別の収量と穂数

注１）播種期は11月中旬、茎立期追肥窒素量は２kg/10a
注２）農業研究所水田利用研究室転換畑（平成27年播種～平成29年播種の平均値、中細粒灰色低地土）による結果

「キラリモチ」の安定栽培法

「キラリモチ」は短稈で、耐倒伏性に優れているため、多肥による倒伏が比較的発生しにくい品種です。しかし、窒素追肥量が多いと遅れ穂が多くなるため、遅れ穂を抑えつつ収量をあげるには、基肥に重点を置いた施肥法により、基肥窒素量は10a当たり標準～標準プラス２kgが適しています（**図１**）。窒素追肥は茎立期に10a当たり２kgまでとします。

「キラリモチ」の経済性評価

「キラリモチ」の11月中旬の播種期における播種量と基肥窒素量の組合せ別の所得を比較すると、播種量は10a当たり８kg、基肥窒素量は10kgの組合せで最大（76千円/10a）となります（**図２**）。

以上のことから、11月中に10a当たり８kg播種し、基肥窒素量を標準プラス２kgとすることで、多収となり、収益の向上につながります。

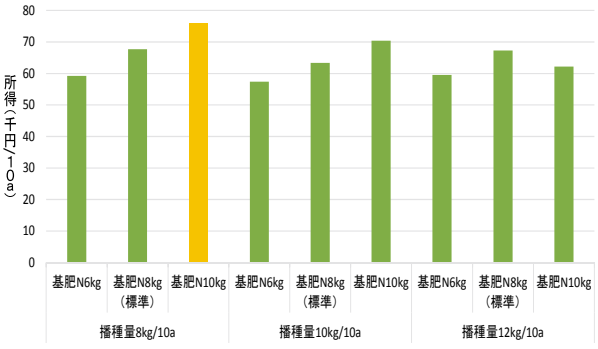

図２　「キラリモチ」における播種量と基肥窒素量の組合せ別の所得